

序文

第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展が開催される2010年は、1960年に日本からメタボリズムという概念を発信して半世紀たつという年である。メタボリズムとは、日本が世界に向けて初めて発信した建築・都市についての影響力のあるマニフェストである。そのコンセプトは、都市を機械のように機能部品の置き換えによって新陳代謝させるという革命的なものであった。しかし、そのメガロマニアックな都市イメージは、実際には現前していない。だが、この50年間で東京の様相は凄まじい変化を遂げたことを考えれば、メタボリズムによって言語化された概念は静かに進行していたと言える。

東京はヨーロッパで見られる連続壁体でつくられる都市構造ではなく、1つ1つが独立した建物(グレイン)の集合体として構成されている。すなわち個体の個別変容が容易に行なえるシステムを内在しているのだ。絶え間なく生成変化する独特の様相を観察していると、東京という街が「新しい建築」、そして「都市建築理論」を生み出す孵化装置であることがわかる。

2008年の資本主義経済の大きなクラッシュの後、資本権力のアイコンとしての建築が都市の主役から退場し、生活を支える建築のあり方が問われている。都市とは経済活動の場であるのだが、同時にその空間の大部分を占めるのは生活の場である。「東京」という都市は、その都市のビジョンを決定する主体の存在は明確でないが、これまでの都市が強大な公的権力や資本権力によって形成されたのに対して、生活を中心とした静かな都市要素の変化の集積によって壮大な都市の変化を創る可能性を示している。

北山 恒